

浄

monthly
JŌDO

土

1998 July

7





テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは
お客様センターへどうぞ



0088・82 (無料)

(受付時間) 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の心と熱意を紀行する。

焼津

光心寺

光心寺本尊阿彌陀如来坐像



焼 津
光 心 寺

本堂で詠唱の練習をする光心寺吉水
講員。指導するのは先代住職夫人の
北山秀子さん



境内にある初代の波除け地蔵。この
右側に小泉八雲ゆかりの龍舌蘭が咲
いている

水揚げされたばかりの鮮魚がせり落とされる。焼津港にて



焼津の観光名所のひとつ、大崩海岸



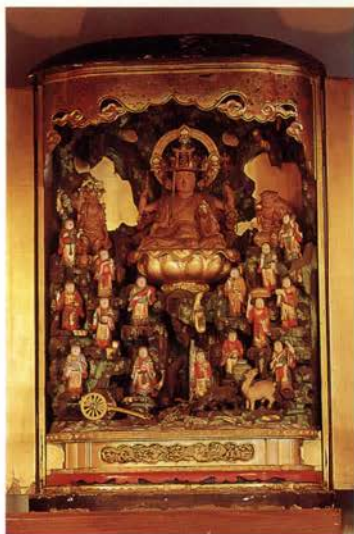
焼津神社境内に立つ日本武尊像。武尊の放った向え火から焼津の地名が生まれた

光心寺文化財の麒麟の笙。
遭難した漁師慰霊法要で奏でられる



昭和十一年の移転時に造成した整然とした墓地は見学者も多かった。いまでも当時のままだ





護信寺の本尊は、漁の安全祈願を叶えるという弁天様だ



海岸沿いにあった光心寺跡に建てられた海光山護信寺。現在は北山良祐上人が住職を務めている

光心寺の皆さん。右から北山秀子さん、先代住職良祐上人、現住職大超上人、奥様の昌代さん。そして男の子のお子さん二人。後ろは書院玄関



撮影・タカオカ邦彦

浄土

1998/7月号 目次

カラグラフィア寺院紀行「光心寺」	写真=タカオカ邦彦	3
選択集のみこころを頂く	藤堂恭俊	8
寺院紀行 焼津「光心寺」	真山 剛	16
表紙は語る	川井 聡	25
選択集を拝む	須藤隆仙	26
選択集絵解き物語	大室了皓	35
身障者から学ぶ	高木悦男	46
松島定宣先生	日下部謙旨	52
無明抄	秦恒平	58
Jフォーラム		65
事務局便り		69
編集後記		70



表紙題字=浄土門主 中村康隆親下
 表紙撮影=川井 聡
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

選擇集の
みころを
頂く

大本山増上寺法主

藤堂恭俊

我が宗祖大師法然上人は、御年六十六歳のとき、『選擇本願念仏集』という畢生の大著を撰述されました。上人は後日、愛弟子での中に浄土宗第二祖と仰がれる聖光房弁上人に向かつて、「善導大師さまは本願念仏の一義を觀經疏の上に示され、わたくし源空は選択の一義をもつて選択集を撰述しました」という意味のことを語られました。この宗祖上人のご述懐によると、『選擇集』の内容は単なる師説の伝習ではなく、善導大師の妙釈を踏えながら、百尺竿頭を一步進められた宗祖上人のご自負のほどを感じとることができます。

宗祖上人は比叡山の三塔十六谷の一つ、西塔の黒谷叡空上人の膝下にあられた頃、報恩藏という経藏にこもつて、聖教の上に自分のような三学の器うつらもてない人間の、「心に相應する法門」、「身にたへたる修行」を、血眼になつて探究されました。その最中に手にされた恵心僧都源信の『往生要集』を精読された宗祖上人は、「私にいわく、恵心（僧都が）理を尽して往生の得否を定め給うには、善導和尚の専修雜業の（十即十生 百即百生の御）文をもつて指南となし給う。（中略）しかれば即ち恵心（僧都のお説）を用いる輩は、必ず善導さまに帰すべし」と、『往生要集料簡』のなかに述べられています。

上人はこれのお言葉どおり、比叡山をはじめ他山の経藏に善導大師のご遺文を探したずねられた甲斐あつて、『般舟讚』を除く四部八卷を得られ、その遺文をとおして善導大師に直参、その教えに導かれて遂に四十三歳、承安五年の春、浄土宗を開創されました。

ここにいう浄土宗の「宗」というのは、一人ひとりの人にとって、唯一絶対の心の支え・

よりどころを意味しているのです。つまり浄土宗という教団を成立せしめる僧俗、人にかかわることでありますから、単なる教団を指すものではありません。そうした意味を持つ浄土宗の教行は、建久九年に九条兼実公の懇請をお受けになって撰述された『選択集』のなかに、体系的にお示し下さったのであります。ついて建暦二年正月二十三日、高齡八十歳でご入滅されるにさきだつて、『一枚起請文』を綴られて浄土宗の肝要をお示し下さいました。この『一枚起請文』と『選択集』の分量と内容について、「ひろげたるが選択集、すばめたるが一枚起請なり」と、傘にたとえて捉えられています。

選択とは選りすぐること。つまり粗悪なものを選び捨て、善良なものを選び取ることです。この選擇と撰取は私たちの日常生活の中で、頻繁に行っています。とくに買物される奥様がたは、鵜の目鷹の目で品物の品質、形相、色彩、軽重、季節、価額などを念頭にして、念には念を入れて選りすぐっていられます。これに対してメーカー側もまた、消費者に喜ばれる最良の品を製造し、よりお安い価額で供給することに努力をかさねて、信頼を得るように日夜頭をしばっているのです。このように供給する側も、需要する側も、ともに選擇をくりひろげながら、双方が満足することを望んでいます。

このように選りすぐって造られた製品であっても、焼かれたり、壊されたりすることは必定であります。また、選りすぐって自分の所有物になつてしまいますと、さらによりよ

いものを追い求めて、やまないのであります。かくして需要と供給の双方において、限りなく選捨選取をくりひろげる所以は、選択された中味が相対的であるからであります。これに比べて生き死にを離れる主体的な営みであって、質的に異なる『選択集』における選択の独自性を伺ってみようと思います。

宗祖上人は『選択集』のなかに、二とおりの選択義をお示しになっています。一は仏による選択で、称念仏の一行が浄土三部経の「宗教」、つまり極致・帰結であることを、八とおりの選択義によって示されています。今一は人による選択で、速やかに生き死にを離れて、往生浄土の素懷をとげることにについて、段階的に三とおりの選択義を示されています。はじめに、仏による選択を八とおり示されていますが、その根本はなんと申しまして阿弥陀さまの本願念仏、選択本願が根本であり、他の七とおりの選択、つまり阿弥陀さまの選択摂取、選択化讃、選択我名も、お釈迦さまの選択讃歎、選択留教、選択付属も、六方の諸仏さまによる選択証誠も、つまるところ選択本願の顕彰に外ならないのであります。なぜかと申しますと、お釈迦さまは、阿弥陀さまの選択本願の願意をご自身の誠意とし、しかもそれを後の世に伝えることをご自身の出世の本懐とされたお方であり、また、六方の諸仏さまはお念仏をする人が、阿弥陀さまの極楽浄土に往生することを、間違いないと一ときに口をそろえて証誠された方がたであるからであります。したがって八種選択の根

本である選択本願義に基づいて、仏による選択義を述べることに致します。

阿弥陀さまは人間の性（結使・煩惱）に翻弄されて一人歩きもおぼつかない私たち人間（煩惱具足の凡夫）を、哀れに思ひ召され、何としてでも一人も漏れなく、一人ひとりわが身許（極楽浄土）で、とわのみのち（無量寿）を具え、生き死にに煩わされない人生に生まれかわる（往生）ように、常に護り、導き、迎接したいというわけへだてのない、広くてあたたかいみ心をおこし、誓願を建てて、それが実現するために選択に選択をかさねて、ついに得られたのが第十八念仏往生の願であります。その願を成就して阿弥陀仏になられてからも今にいたるまで、私たちに向かって「わが名を称えよ、われを呼べ、わが救済の聖意にめざめよ」と、限りなく勧め給うお名号こそ、選択本願なのであります。

次に人による選択とは、人間の性の虜（わづら）になりはてて、生き死にの世界に流浪をかさねているわが身（煩惱具足の凡夫）が、速やかに生き死にから離れるために、いろいろ数多い出離のための実践行法のなか、聖道門（きんぎ）を聞き、浄土門を選びとり（第一重の選択）、ついて阿弥陀さまにたいして疎い浄土往生の行法（雅行）を抛（な）つて、阿弥陀さまにたいして親しい浄土往生の行法（正行）を選びとり（第二重の選択）、最後に阿弥陀さまが本願に指定された称名念仏の一行を専ら決定業として実践し（正定業）、その他読誦等（助業）を傍（かたわら）にする（第三重の選択）のであります。

この二とおりの選択義のなか、選択本願は阿弥陀さまが、すべての人を漏れなく救済す

る聖意を実現するために、数多い行法のなかから特に名号を選択して、私たちに施与下さったのであります。三重の選択は、人が速やかに生き死にの世界を離れる意志を実現するために、称名念仏の一行を数多い行法のなかから選択して、阿弥陀さまの聖意に随順するのであります。つまり人がお名号を選んでお称えするという念仏の一行は、阿弥陀さまによって私たちのために選択され、施与されたお名号を、阿弥陀さまのみ心のままに実践するのでありますから、三重の選択は仏の選択を前提としている、といわねばなりません。しかれば、阿弥陀さまは、人がとなえる称名という実践によって、ご自身の救済意志を実現され、人はまたお名号をとなえることによって、生死を出離し、往生浄土の素懷をとげるのであります。

この仏と人による選択には、仏は人を、人は仏をというように、双方ともに相手を予想していることに気づかされます。だからこの二とおりの選択は、たがいに無関係に両立しているわけではありません。この仏と人との双方が噛みあつてこそ、仏も人も、自身の根本意志である救済と出離生死・往生浄土を果遂てきるわけであります。

このように、阿弥陀さまはすべての人に向かって「わが名をとえよ、われを呼べ」と、煩惱具足の凡夫である私たちに、絶え間なく呼びかけられています。この呼びかけにやつと気づいた煩惱具足の私は、阿弥陀さまの広くてあたたかいみ心に感きわまりながら、「南無阿弥陀仏」とみ名をとえ、声をとおしてお応えいたします。その阿弥陀さまの呼びか

けにお応えする一声一声には、このいたらない私に「とわのみのち」が実のるまで、何卒お護り、お導き、お迎えを頂きたいという切なるおもいを、「南無阿弥陀仏」の声に託して、阿弥陀さまをお呼び申し上げるのであります。そうしますと、阿弥陀さまはその声を今やおそしとお聞きとりになり、その切なるおもいに応えて救いの手をさしのべられるのであります。このように口称念仏の一行は、阿弥陀仏を發信地とする仏凡の人格的呼応關係と、煩惱具足の凡夫である私を發信地とする凡仏の人格的呼応關係の上にくりひろげられ、願生者の心の興行きを深め、感應道交して仏凡一体の新天地がひらかれるのであります。『選択集』の末尾に示されている「念仏の行、水、月を感じて昇降を得たるなり」という宗祖上人のご述懐は、この辺の消息を語られているのであります。

口称念仏の一声一声は、煩惱具足の凡夫であるわが身、わが心のすべてを打ち払い、投げ捨てつつ、阿弥陀さまの平等大慈悲のふところのなかに、とび込むことであります。したがってお念仏の一声一声ごとの「南無阿弥陀仏」は、阿弥陀仏にすぎり、まかせることでありますから、自己の空無化であります。つまり「南無阿弥陀仏」と自分のはからいを投げ捨てながら、阿弥陀さまにすぎり、まかせ（帰命）、お護り、お導き、お迎えを願う（發願）ことは、その念仏者の心内に阿弥陀さまを勧請することであり、阿弥陀さまを心に宿すことであり、阿弥陀さまを心の主人公とすることであります。

そのようにして念仏者は、心に阿弥陀さまをお迎えいたしますから、おのずから今のさ

きまで主人公として采配をふるっていた煩惱を断じないまま、はたらかなくなるのです。

宗祖上人が『無量寿経釈』のなかで、「往生浄土の法は、これ未断惑出三界の法なり」と述べられているとおりなのです。たとえばお念仏によって罪を滅すと申しますが、わが身の上に過去から今にいたるまで積もりにつもり、かさねきたった衆罪が、皆ことごとく消滅するわけではありません。宗祖上人が式子内親王に宛た書簡のなかに、「一声にをのをの八十億劫があいだ生死にめぐるべき罪を滅して」と示されているように、これからさき永劫にわたって罪が造れなくなるのであります。さらに念仏者は阿弥陀さまの光明に触照されますから、持戒、忍辱、智慧の修行を実践しないまま、貪欲と瞋恚と愚癡のはたらきが除かれて、持戒清浄の人、忍辱の人、智慧者とかわらない人に生まれかわると、『逆修説法』の上にお示し下さっています。

かくしてお念仏は現世において人格の形成に欠くことのできない大きな役割をはたし、さらに死後には往生極楽の素懷を果遂しますから、まさに現当二世にわたる巨益を内に具えているのであります。

南無阿弥陀仏

寺院紀行

文／真山剛

焼津
光心寺



常照山光心寺本堂正面

撮影／夕力才力邦彦

「焼津は神様の里だ、東京には神様はいないが、焼津には神様がいる」と語ったのは、小泉八雲こいずみやくもの名で知られる明治時代の作家、ラフカディオ・ハーンである。

ハーンはギリシャ生まれ、十九歳でアメリカに新天地を求め、記者として成功。渡米の十五年後、ある博覧会で日本の美術工芸品とてあい日本に強く魅かれる。そして、四十歳で来日。英語の教師として教壇に立ち、松江、熊本、神戸、東京と移り住んだ。松江で小泉セツと結婚、四十五歳で日本に帰化し、東京で五十四年の生涯を閉じるが、教壇に立つ傍ら著述に励み、東京在住時の晩年に一番愛した焼津を題材にした作品をいくつも書いている。

亡くなった年を含めて八雲は六度の夏を焼津で過ごしたが、焼津にとっても八雲は愛すべき先生で、焼津駅前には八雲像が建っている。そして大理石には彼の『焼津にて』の冒頭が彫られている。

「焼津というこの古い漁師町は、日がカッとさすと、妙に中間色のおもしろ味が出てくる町だ。この町が臨んでいる小さな入江、その入江に沿う白茶けた荒磯の色が、まるでトカゲのような色をおびてくるから妙だ。町は、ゴロタ石を積み上げた異様な石垣で、荒い海から守られている。この石垣のてっぺんから、陸の方を眺めると、小さな町の全景がひと目で見渡される。灰色の瓦屋根の広いひろがり、風雨にさらされて白茶けかえった家並み。そのあいだに、とこ

焼津を愛した小泉八雲風脈の地記念碑(右)と小泉八雲こと、ラフカディオ・ハーンの像



ろどころ松の木の茂っているのは、寺のある場所を示している。目を転じて、海の方を眺めると、これはまた紺波碧濤数マイル、いかにも雄大な眺めである。(以下略)

目的地の光心寺を訪れる前に、駅前はこの碑を読んだが、その時は正直いって「はあーん、そうなのか」と軽く読み流してしまった。しかし、こうして焼津の町をどう書こうと想いを巡らせると、この冒頭の一節にその特徴が見事に書き込まれていることに気づいた。まさに八雲の焼津への思いの深さに感じ入るばかりだ。

この八雲の足跡が焼津の町には数多いが、光心寺もゆかりの地のひとつだ。八雲が焼津に来る度に世話になっていた山口乙吉は、八雲によると「神様のような仁」で、その乙吉と一緒に海岸で拾った熱帯植物の龍舌蘭や、八雲が修復しようとした波除け地蔵がこの光心寺にある。そして、山口乙吉の菩提寺もこの光心寺である。

当時、八雲が焼津に来ていた頃の光心寺は海に接していた。もとも大井川の三角州である焼津は、現在も大井川の伏流水が流れる水の豊富な地域だが、それだけに海岸が浸蝕されやすく、資料を見ると江戸後期には一年ごとに一メートルから数メートルずつ浸蝕されている。八雲が来ていた明治にもこの浸蝕は続いていて、光心寺の境内は年々海となっていたという。

江戸末期の唄に「北新田村に すぎたるものが 三つある、こい



光心寺にある小泉八雲と親交の深かった山口乙吉の墓

す こびとう 光心寺（こいすとかびとうは人名でそれぞれ功を成した村人）と謳われたぐらいの立派な伽藍と境内を誇った光心寺だが、その境内は年々浸蝕され、狭くなっていったという。

八雲が「異様な石垣」と書いた防波堤は今も千四百メートルも残っているが、浸蝕は防げていてもその高さ数メートルの防波堤を乗り越え海水が町に流れ込む。光心寺の先代住職は、子供のころ下駄が波に揺られ寺の中を行ったり来りしていた、と話してくれた。江戸時代から漁師町としてその名を全国に轟かせていた焼津は、海によって生計を立てつつも、その海によって危機にさらされてきた町なのだ。光心寺も海に生きる漁師に支えられ、その海によって脅かされてきた。

さて、こうした境内の狭絏化のため光心寺は移転をする。昭和十一年、第二十一世忍良上人の時だった。大正三年の住職拜命から二十年、世界恐慌などを乗り越えるなど、それこそ移転にその心血を注いだ二十一世は移転後の翌年に他界されてしまった。当時の墓地移転は警察の管轄で、それこそ警察に日参、そして現在でも他に類を見ない整然とした墓地として生まれ変わった。その墓地を見ようと全国から宗派を問わず僧侶が見学に来たという。その墓地は当時のまま本堂わきに広がっているが、整然としているうえ、実に機能的にできている。

昔からの漁師町、焼津の港と漁船



移転後程なく戦争が勃発。移転はしたものの光心寺は本堂がないまま十五年、浜にあった頃を含めると九十六年間の月日を過ごすこととなる。そして昭和三十五年、念願の本堂が第二十二世良祐上人の時に完成する。百年前にあった十間四方と同じ大きさの、そして過去三度の火災での焼失、地震での崩壊の轍を踏むことのないように、鉄筋の本堂ができた。

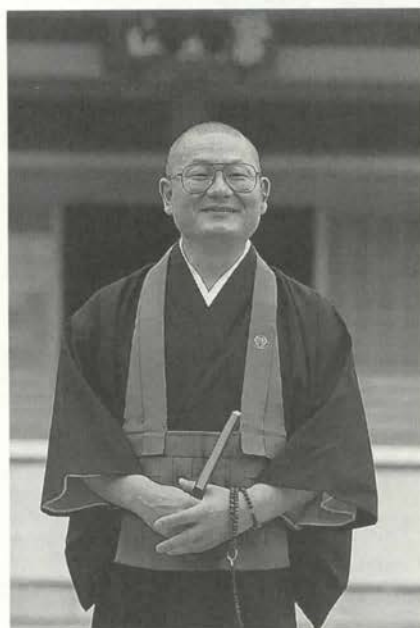
その本堂の写真を見て、読者の僧侶の方の中には「この建物でしたか」と思い出される方も少なくないかもしれない。築地本願寺をイメージしたという本堂はマスコミにも取り上げられ、全国青少年教化協議会発案の『現代に生きる法然の教え』と題するビデオのタイトルバックに使われたという。七年計画で一千万円を目標にした本堂建立基金が予定よりも順調に集まっていたが、その本堂は独創的な外観も手伝い、全国に宣伝されたのである。

しかし、その本堂も二十五年後の耐震検査で耐用年数の限界が指摘されることとなる。そして東海地震を経験している地域だけに耐震耐火に十二分に配慮しつつ、末代までかつ光心寺の威容を再現する木造の本堂への建て替えとなった。その新本堂は平成元年に完成。位牌堂も完成した平成六年には落慶式を行った。昭和六十一年から積み立てた資金はおよそ四億円。寺と檀信徒がまさに一丸となつての大事業だったという。



二代目となった波除け地蔵は石垣のすぐ内側の祠に祀られている





光心寺第十二世願堂大超住職

昭和三十五年に完成した前の本堂。
写真は建て替えにあたってのお別れ
記念のテレホンカード



光心寺境内。この二十年、母朝境内の掃除をしてくれるお檀家さんがいらっしゃるといふ



しかし、数百軒余の檀信徒があるとはいえ、立派な本堂を建て直す形での積み立てだけに、よくそれだけの協力を得られたという疑問をぶつけてみると、「板子一枚、下は地獄という漁師さんたちは神社、神仏にはとても篤く、また、まともにもとても良いのです」と第二十三世大超住職が答えてくれた。

歴史を繙けば、七、八百年前に真言宗として創建された寺を慶長十一年（一六〇六）に明譽月公上人が京都の総本山知恩院直末の浄土宗の寺院とされたのが光心寺の起こりで、言い伝えては沖合にあった真言宗の寺が津波で流され、その阿弥陀堂がかつての光心寺の場所に流れついた。そこに開山の明譽上人が請われるままにその阿弥陀堂に住し、近隣の信仰のより所にされたということだ。

以来、焼津の浜の南の漁方の漁師は真言宗の寺を、北の漁方の漁師は光心寺をそれぞれの信徒寺、祈願所として、漁の安全祈願をしていたようで、光心寺には弁天様や波除け地蔵が祀られていた。現在はいくつ目となった波除け地蔵も石垣わきに残っているし、光心寺のあった場所に光心寺の末寺として護信寺が建っていて、そこには弁天様が今も奉られている。ちなみに初代の波除け地蔵は現在の光心寺境内に祀られている。

また、第五福竜丸が有名だが、焼津は海難事故も少なくなく、かつては隔年で北と南の漁方が近隣の寺々の協力を仰ぎ、海難者の大

「荒祭り」で名高い八月の例大祭渡御
神事は焼津神社への信仰の現れだ。
写真は焼津神社本殿と拝殿



万葉集に詠まれた古代の東海道、やきつべの小径は日本坂を通って小坂に出る。現在はハイキングコースとなっている。



供養を行っていたという。主催する側が一方を客として呼ぶ供養で、供養ながら年々派手になり、戦後は統一して漁業組合が主催することになったという。このように漁師と寺院の結び付きは強い。

さて、こうした焼津という土地柄、人柄に支えられてきた光心寺だが、特筆すべきはその寺の行事の多さである。

現在、光心寺には先代住職の北山良祐上人、その奥様で全国の浄土宗寺院婦人会会長の北山秀子さん、お二人の次男で現住職の北山大超上人、そしてその奥様の北山昌代さん、若住職夫婦の二人の男の子さんがいらっしゃる。取材の当日は吉水講の詠唱の稽古日で百名を超えるご婦人が集まっていたが、その先生は秀子さん、接待が昌代さん、若住職は法式の会合と大忙しだった。周辺取材でも「本当にいろいろな事をしていらっしゃるお寺」と聞いていたが、まさにその通りだった。

そして、数ある会合の中でも古いのは「ありそみ会」という昭和二十三年にできた青年会。ありそみとは荒磯からとったもので、もともとは成人式だった。しかし、国が数年後に成人式を制定したのを機に青年式と名前を変更、今日に至っているが最年長の会員はなんと六十四歳。寺の婦人会も昭和三十五年、鉄筋の本堂落成とともに始まっている。また昭和二十二年から法式教室を開き、近隣の寺院僧侶を集め、東京の増上寺から先生をお呼びしている。



曹洞宗の名刹、林叟院。かつては現在とは海となつてゐる焼津海岸沿いにあり林叟院と号してゐたが、故あつて現在の高阜山山麓に移つた

こうした会合の他に御忌、施餓鬼、十夜といった法要、さらには檀信徒の信仰をより深めるための五重相伝、毎月一日の朝参り、毎日曜の朝参りと本堂に行事が目白押しだ。

先代住職はこう語る。「町の八百屋さんはリングゴ並べて買ってもらおうとするとき、ただ置いておくのではなく買ってもらえるように磨いている。寺も同じで、いつもきれいに磨いておく。そして皆さんに来てもらおう」。また「何でも五十年ぐらいやって実を結ぶ」という先代の言葉は、昭和十四年から平成五年まで住職として光心寺を守ってきた中で、先々代の移転の苦勞を見、二度にわたる本堂の落成を成し遂げただけに重みがある。まさに檀信徒あつての寺院を実践してきた寺である。

焼津はその昔、日本武尊が東国の蝦夷征伐でこの地を通った時に野火の難に遭われた際、天叢雲剣で草を薙ぎ、向火を放って難を逃れた焼遺^{やきつ}から焼津と命名された地で、奈良平安時代の東海道でもあった。ここでは紹介できなかったが多くの神社仏閣がこうした長い歴史を刻む地でもある。

焼津の海をこよなく愛したという小泉八雲も、こうした焼津の歴史にふれ筆を執ったに違いない。その八雲は「古いしきたりや古い神仏に忠実な焼津」と言うが、平成の今になっても形は変われども、その心意気は変わる事なく間違ひなく続いている。

(ルポライター)

先代の良祐上人は本年四月の大本山増上寺での御忌で唱導師をつとめられ、「選択集」奉戴八百年記念で新調した「選択集」縫い込みの袈裟(右)を着けられた。また、法要も光心寺での御忌法要と同じ形とし、大役を果たされたという



表紙は語る

車窓から

写真と文

川井 聡

月

乗降客の途絶えた
駅には哀愁だけが残る
あるいは不意に
客車の窓の木枠から
懐かしい旅
の記憶がよみがえる
鉄路の果てに
彩いていくひとり
ひとりの人生

山陰本線 竹野 付近

兵庫県竹野町

先日、タイの列車に乗ってきました。彼の地ではまだオールドスタイルの客車が現役です。優等列車は「自動ドア・空調付き」ですが、残りは、まだ木製の室内、手動ドアの車輛です。まだ停車する前から、ドアに手をかけて乗りこんでくる人や、

「暑い車内よりこっちがいい」とばかり、開けっぱなしのデッキに座って、風と風景を楽しんでいる女の子もいました。

高速で走る列車ですから、けっこう危険なのですが、ここではこれは当たり前の風景です。もっとも日本だって、ほんの少し前までこういう光景は当たり前でした。

開け放したデッキに立って流れる風景を見ているのは、爽快感とスリルがスパイスとなつて、僕の好きな瞬間でした。

かわい さとし 現在、国内の鉄道旅行ガイド制作のため、日本全国のローカル線と温泉をめぐりながら取材中。自宅より取材先にいる方が長いらしい。

新連載

撰む 選択集を (一)

須藤隆仙

●選沢集を身読する

親鸞聖人は「見るもの論り易し。まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり」と讃え、日蓮聖人は「聖教を破し遍く十方の衆生を迷わす」と憤慨した『選沢集』、正しくは『選沢本願念仏集』。法然上人(以下「元祖様」と記す)が建久九年(一一九八)にお著しになられてより、今年は満八百年に正当しますので、「選沢本願念仏集奉戴八百年記念」として、さまざまの行事があります。

私が『選沢集』の名を初めて知ったのは十三歳のときでした。その前年、菩提寺のご老僧に導かれて、田舎の商家から函館の寺に上って、兄弟子が布教師から『選沢集』を習っている傍で、「その屋舎の名字の中には棟・梁・椽・柱等の一切の家具を撰すれども、棟・梁等の一々の名字の中には一切を撰することあたわざるが如し」などと、その文を暗記したものであります。



やがて、師僧の高恩により大正大学に学ばせていただき、石井教道博士の『選沢集』演習に出席させていただくことになります。

ちょうどそのころ博士は、そのライフワークであられた選沢集大研究の講述編と註疏編とをすでに世に出されて、最後の総論編を完成されたところであり、それは昭和二十六年九月、京都の平楽寺書店から『選沢集の研究・総論篇』として出刊されたのでした。私は当時、博士が主任をされる浄土学研究室の学生委員長を仰せつかっておりまして、博士の『選沢集』の新刊高著の発売をお手伝いさせていただいたのは、ひじょうに幸せな思い出であります。

博士はつねに、「選沢集は、拝読するたびに新たな発見があり、教えられるところがあり、信仰を深めさせていただけるのです」と語っておられました。そして、天台の学匠明禅法印が『選沢集』を読んで「一遍はなにともしいわくかたなく見終りぬ。二遍は偏執の罪や招くらんと思ひて見終りぬ。第三遍よりは深

旨ありと見なして、四、五遍これを見るに信を増して疑い無し」といわれた話や、元祖様の高弟湛空師が「学問は選択集にすぐべからず」と感激された話などを、して下さったものであります。

まことに『選択集』こそ、日本の思想界、宗教界を、がらりと変えてしまった大問題の書であつたことは、今日、家永三郎博士などが、「親鸞の思想も、日蓮の思想も、同じ法然から分岐した二つの枝である」と学説されておられる（博士著『中世仏教思想史研究』）ことによつても、知ることができるのです。

今、奉戴八百年の勝縁に、改めてこの宝典を身読し奉る所以であります。

● 三点の教示

元祖様の御文は恐ろしいです。突然、ドカーンと来ます。度肝を抜かれます。『一枚起請文』でも、突然「もろこし我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる、観念の念にもあ



らず」と来ます。主語がありませんから、何のことだかちよつと戸惑いますが、だんだん拝読していくと分かつてきて最後は合掌させられます。

『選択集』でもそうです。第一章は、いきなり「安樂集の上に云く。一切衆生はみな仏性あり」と、こう来るのです。突然にです。

ところが元祖様は、本文の前に自ら標章文を記しておられます。「篇目」というのですが、この章は、こういうことを述べるのですよ、という見出しのことです。それによつてあらかじめ大意が分かるのですが、本文のほうは右述のようにドカーンと来ます。そこで篇目の意味をよく読んでおいて本文に移る必要があるわけですが、第一章の篇目は、「道綽・聖道・浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文」というのです。つまり、中国唐代の高僧道綽・聖道門と浄土門の二教を示され、聖道門は捨てて浄土門に帰入しなさいと勧められたこと

を明確にする章、というわけであります。そして本文に移るのですが、本文がいきなり「安樂集の上に云く。一切衆生はみな仏性あり」と来る。じつはこれは、仏教の重大真理を開示された一大轟音なのであります。そこで、そう思つてまず本文の重要な部分を少し読んでみましょう。

「安樂集の上に云く。問うて曰く、一切衆生はみな仏性あり。遠劫より以来、まさに多仏に値いたてまつるべし。何によつてか今に至るまで、なお自ら生死に輪廻して火宅を出でざるや。答えて曰く、大乘の聖教によらば、まことに二種の勝法を得て、もつて生死を排わざるによる(略)。一には謂わく聖道、二には謂わく往生浄土なり。それは聖道の一種は、今の時、証し難し。一には大聖を去れること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる(略)。当今は末法、現にこれ五濁悲世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり(略)。た

とい一形惡を造れども、ただよく意を繋けて專精に常によく念仏せば、一切の諸障、自然に消除して、定んで往生することを得。」

大変な御文章であります。「安樂集」上巻の文の転記なのですが、大変な内容であります。少くともここでは、三つの重大なことが語られていたのであります。次の三つです。

- ① 生きとし生けるものには、みな仏性(仏に成る種)があるのだ、という教示。
- ② 人々は多くの仏様にすでに会っているのだ、という教示。

③ 罪惡生死、三界流転の身ながら、浄土の救いの門が開かれていますぞ、という教示。

以上ですが、これはもう、これだけで『選択集』の概要といつてもよいほどのものであります。元祖様は、このすばらしい『安樂集』の御文をもつてこられて、『選択集』の冒頭をかざられたのです。ですから最初にこのところを、きちんと胸中に頂戴いたしまし

て、それから全文を拝読していかねばならぬと、こう愚考するものであります。

● 仏性ということ

①の仏性ということですが、仏教の一大特色は、じつにこの仏性の教えにあるのであります。仏教を一口でいえば、転迷開悟（迷いを転じて、悟りを開く）ということに尽きるのですが、その開悟とは、仏性というへ仏に成る種、へ仏に成る可能性があるから実現されるものなのでありまして、これに気づかせてもらうのが、仏教の第一歩であります。

不肖の私ではありますが、函館刑務所の教誨師をさせていただいております。私はその仏教講座で、必ずこの仏性の話をしております。ある時、私が外出中に、刑を終えられて出所し郷里へ帰られるお方が、「ぜひ先生のお寺にお参りしてから帰りたい」といって、本堂にお参りして行かれたことがありました。



そのことを聞いて、私は、その方の郷里の方角に向いて合掌し、お十念を称えましたが、涙がとめどなく流れました。みな共に凡夫ですが、仏性があるのだ、こんな力強い教えが他にあるではありませんか。

また、四十年前も前のことですが、地方の小さな寺の住職をしておりましたとき、ある商店の主人が訪ねてこられて、「仏性とは何ですか」と聞くのです。当時、東北のある地方に、大変な売上高の店があつて、そのことが商業雑誌に紹介されたので方々から商店経営者が見学に行き、この主人も行ってきたのだそうです。「どうしてこんなに儲かるのですか」という質問に対し、その店主は、「お客様に仏性を見い出すことです」とだけ答えるというのです。それ以上の説明はしないのだそうにして、聞いた人たちは、「仏性」とはどうやら仏教語らしいというので、帰って坊さんに聞くと、こういうわけでありました。つまりその店主は、客の一人々々を、仏様だと思つてい

る」というのでありましょう。すばらしい話だと思いました。それからだいたつたつてから、歌手の三波春夫さんが、「お客様は神様です」といい出したので、私はおやつと思つたものでした。

とにかく、『選択集』の第一頁は、この「仏性」の教えから始まるのであります。仏性の自覚、今日ほどこれが大切な時代はないのではないのでしょうか。

● 仏様との出会い

②の、多くの仏様にすてに会っているということですが、これも改めて再認識すべきこととがらではないでしょうか。

仏教では、仏様のお姿に三種ありとして、これを三身さんじんといいます。イ法身ほっしん、ロ報身ほうじん、ハ応身おうじんの三種であります。法身は宇宙そのものを仏と見るのであります。報身は阿弥陀仏や薬師如来のような救済主としての仏様でありまして、これは宇宙・大自然のなかにある私



たちを育ててくれる力、と見てもよいでしょう。応身は化身けんじんともいい、実際に私たちの眼前に現れる仏様でありまして、人間の感知能力に応じて現れて下さるから応身というのですが、化身とも申し上げるとおり、仏様が変身された姿でもありまして、それは深く考えますと、私たちの日常生活のなかで、いくらでも体験していることなのであります。例えば、浮浪者などを見て、私たちは自分の今日の立場に改めて感謝させられることなどが多いのですが、この浮浪者こそ、私を導く仏様なのかも知れません。私の住む函館で、実際に次のような話があります。

明治から大正にかけての話ですが、万平まんへいという名のおこもさんがいたのです。人々は「乞食万平」と呼びましたが、ごみ箱から食物を拾うのであって、けつして門口に立つようなことはしませんでした。かの石川啄木と親しかったのです。この万平さんが道端に座ってタバコを吸っていましたところ、大阪から来

ていた鉄工場主がそこを通り、自分もタバコを吸おうとしたがマッチを持っていなかったため、この万平さんに「おい、火をかせ」といったのでした。乞食だと思ってぞんざいな言葉でいったのです。すると万平さんは「あなたさん、人から物を借りるときは、帽子をぬいて言うものですよ」とたしなめたのでした。びっくり仰天した工場主は、すっかりこの万平さんのファンになってしまいました。大正四年、万平さんは亡くなりましたが、これを伝え聞いた工場主は、神戸産の本御影石で五輪の供養塔を造り、これを函館の知人に送って、函館山麓に建ててやったのであります。この供養塔は今も現存していて観光客の話題になっておりますが、この人こそ、仏様だったかも知れません。

こう考えてくると、私たちは知らず知らずのあいだに、たくさんのお仏様とお会いしているのだらうと思います。化身だけではなく、大自然もまた仏様であります。中国宋の詩人



蘇東坡は、「溪声は便ち是れ広長舌、山色豈清浄身に非ざらんや」とうたわれました。谷川のせせらぎは仏様の説法の声であり、山のたずまいは清浄な仏様の体そのものである」というのです。

このように私たちは、自分の心さえ聞けば、いくらでも仏様とお会いすることができるとあります。いや現にお会いしているのです。そのことに気づかせていただくことが先ず大切なのであって、『選択集』はそのことを教えているのであります。

●現代に生きる人間観

③は現代に生きる人間観として、最も肝要なことではないでしょうか。

今日、人間は偉くなり過ぎたようであります。中学生が「人間はどのくらい危害を加えれば死ぬのか試してみたかった」といったというニュースなど胸が痛みます。私のところへも、殺人を犯した拘置中の若人から、「命を

奪った人を、自分の手で成仏させてやりたいので、その方法を教えて下さい」という手紙がきて驚いたことがあります。私は、「その方はご遺族方の懇ろなご供養により、すでに立派に成仏されておられます。あなたは、ただひたすら、その方のみ魂にお詫びし、懺悔されればよいと思います」といつてやりました。現代人の恐ろしいことは、自分の手で、他人の命を活殺自在に操れるのだ、と思っていることです。そうすると、やがて自分もそうされる、ということにまで考えが至っていないのです。これが最も悲しいことです。

しかし、科学者はクローン動物というところでもないものまで作り上げてしまいました。近いうちに人間への応用も可能だということです。これを作ると宣言した学者も現れました。先進国の政治家はこれに猛反対し、ローマ教皇も禁止を呼びかけております。だいの大人たちが、それも知識を誇る科学者たちがこんな恐ろしいことをしているのです。若い人た

ちがまねるのも無理からぬことではないでしょうか。

心ある人たちは、すでに敗戦間もない頃から、人間が人間至上主義、人間自体の過信へと突き進んで行き、そこにとんでもない落とし穴のあることを、注意しておられるのです(例えば、高山岩男著『現代の不安と宗教』など)。そしてそれを救うものは「宗教的無我」だとも指摘しておられるのです(同書)。

元祖様はすでに八百年も前にそのことを教えておられるのであります。まず、煩惱の迷界を右往左往している自分に気づかなければなりません。ですから元祖様は『太原問答』に、「聖道を捨てて浄土に帰する濫觴^{らんしょう}は、制し難き罪障の故なり」と仰せられておられるのであります。(つづく)

(法然上人 観仰会理事・面館／称名寺住職)



記 時 歳 教 仏

孟蘭盆会は七月十三日から十五日まで行う仏事ですが、東京と幾つかの地方ではそのまま陽暦の七月、その他の大多数の地方では月遅れの八月十三日からとなっているようです。

昔はすべて陰暦ですから、歳時記では当然秋の行事となっています。

お施餓鬼の法要も、お盆の終わった頃に催されることが多く同じく秋に位置づけられています。が、これも五月に移した寺院が増えて、合わせて、むしろ

夏の季節の方が強い、といえそうです。

水虫の僧の来たりて盆供養

田川飛旅子

面白い句です。どうしても水虫と分かったのか考えると可笑しくなります。裸足で棚経に回っていたのでしょうか。それとも正座した足袋の指先が痒い痒いと動いていたのでしょうか。

それにしてもお行儀の悪いお坊さんがいたものですね。

お盆

むらさきになりゆく墓に詣るのみ

中村草田男

一転して美しい句。ある寺の掲示板に記してあったことを思い出します。思わず足を止めたそこには、もう一句。

濡らしたるため父の墓去り難し

橋本美代子

が、掲げられていました。心の深い部分に届く佳句ですね。

仙隆藤須 案内書著

色紙・茶掛けなど揮毫の種本

仏教四字熟語辞典

上・下 各 3400円

極楽浄土（生も死も悦べる世界） 1000円

宗教人石川啄木 1440円

仏教故事名言辞典 4000円

仏教用語事典 13000円

仏教ことわざ事典 3800円

●お申し込みは
ハガキで下記まで
(一割引き)

〒040-0055

函館市船見町18-14

称名寺

選択集十六章之図

正徳甲午季冬近州蒲生日野

高田敬輔題於平安旅寓

連載

その二・第五〜八章

大室了皓

選択集絵解き物語

選択本願念仏集は難解な書物であるといわれる。

この絵解き選択集は

それをわかりやすく説明しようとしたもので、

種々の流布がみられる。

ここでは正徳年間の十六章の図を取り上げてみた。



第五章

念仏のご利益

この絵は何を表しているのでしょうか。

お釈迦様は、

「もし阿弥陀仏の名を聞いて、喜びにあふれ、こおどりするまでに信心をおこし、ただ一念なりとも弥陀を念ずるならば、この人は浄土に生まれる大いなる恵みを得たのであり、その恵みはこの上もなき功德である」

と弥勒菩薩に告げられています。

念仏以外の行いには小さな功德しかないが、念仏には一度であっても、大きな功德があるのです。

一遍の念仏が無上の功德を頂くのですから

十遍の念仏（十念）には十の無上、百遍の念仏は百の無上、千遍の念仏は千の無上の功德があり、このように少ない念仏から多い念仏へと進んで、ガンジス河の砂のように、無数の数の念仏になれば、無上の功德もガンジス河の砂のように計り知れないものがあるのです。

この絵には、念仏する弥勒菩薩を大勢の菩薩が讃え、机の上には無上の功德を象徴する珍しい品々が置かれている様子が描かれていますね。念仏には広大な功德のあることを表しているのです。

第六章

不滅の教え



では次の絵の話をしましょう。

お釈迦様は、無量寿経の中で、

「遠く後の世になって、経に説かれた全ての教えが減び尽きてしまっても、私は慈悲の心をもってこの経だけはなお百年の間とどめておくであろう。もしこの経にめぐりあう人々は、いつの世であっても、みな心の願いのままに、悟りの彼岸にいたることができるよう」と説かれています。

善導大師は、往生礼讃の中でうたわれています。

万年ののち、三宝滅ぶとも

この経のみは止まらん

その時間きて、み名よべば

皆かしこにぞ生まれ得ん

他のいろいろのお経が減びても、阿弥陀様



の四十八願を説く無量寿經と念仏の教えを説く觀無量壽經、阿弥陀經の淨土三部經だけは、永遠に残る。だから他の教えは末法の私たちとは縁が薄く、淨土の念仏の教えは、いついつまでも私たちとは縁が深いのです。

この絵には、世の末になって他のお堂などは朽ち果てても、無量壽經（淨土三部經）を奉持するお堂だけは残り、貧しい庶民がお念仏している様子が描かれていますが、以上のことを表しているのです。

なお法然上人は、

草も木も枯れたる野辺に

ただひとり

松のみのこる弥陀の本願

と詠じられています。



第七章

念仏する人だけを照らして下さる。

仏様のお体から十方に向かって光が出ていますね。このお話をしましょう。

観無量寿経に、阿弥陀様の光明は、
「遍く十方の世界を照らして、念仏の衆生を
摂取（救いどつて）捨てたまわず」

と説かれています。

どうしてかと言いますと、念仏以外の行は
どれほどの善根（良い行い）であつても、阿
弥陀様の本願によるものではないから、照ら
しては下さらないのです。

念仏する者は、阿弥陀様と三つの深いご縁
で結ばれています。その三つとは、

一、お念仏を称えると、仏様はこれを聞いて
下さる。仏様を敬い礼拝すると、その
私を仏様は見えて下さる。また仏様を
思うと、仏様もまた私のことを思つて下

さる。

二、仏様を見奉りたいと思えば、仏様はこ
ちらの思いに応じて、目前に姿を現して
下さる。

三、お念仏を常に称えていると、思い罪を
除いて、いざと言う時には、多くの菩薩
がたを引き連れて、浄土から迎えに来て
下さる。そして何時も阿弥陀様に守られ
ているから、いろいろの悪業煩惱もこれ
らの事の妨げにはならない。

このような深いご縁ができるので、念仏す
る者だけを慈悲の光で照らして下さいます。

この絵に、阿弥陀様の光が四方八方に向か
つて出ているのは、念仏する人を一人も決し
て漏らさないで、ということを表しているの
です。

第八章

三つの大切な心

往生を願いお念仏を称える人には、三つの心が供わつていなければならないと、説かれてます。

第一の心は、誠の心（至誠心）です。

内は愚かなのに、外には賢い人と思われようとする。内には悪を作りながら、外には善人らしく見せる。

内には怠け心を持ちながら、外には励んでいるようなふりをする。

このように、内にそらごと、にせごとの心を持つてはならない。と教えられておられます。

第二の心は、深く信じる心（深心）です。何を信じるかという、次の二つです。

一、自分は悪を作り、罪深く、煩惱の炎の中でのたうち回っている。このままでは到底救われるには程遠い悪逆無道人間だと、心の底から信じ込む。





二 このような最低の人間だから、無数の仏様のどなたも救っては下さらないが、

「阿弥陀様だけは、み名を称えれば必ず救って下さる」

と固く信じる。

この絵には、向かって左に南無阿弥陀仏のお名号をふし拝んでいる在家の人、傍らに経文を読んで聞かせているお坊さん、その右には如意を持つてお名号を拝しているように見える高僧（十大弟子の一人か）、更にその上の方には手を差し伸べ教えを語りかけておられるお釈迦様のお姿が描かれています。

おそらく、至誠心・深心という大切なことを在家の人に解き明かそうとされているのではないかと、それが描かれているのではないかと私は考えます。

第三の心は、全てを振り向けて浄土往生を願う心です。（回向発願心）

二河白道のたとえによって、それを明かそうとして絵の大部分を占めています。

刀剣を持った悪人たち、大蛇や悪獣などが逃げていく人を追いかけています。

絵ではよく分かりませんが、このものたちの先には河があつて、これ以上は追つて行けないのがくやしくて、大声を出しています。

この河には幅四・五寸ほどの白い道が、こちらから向こう岸についています。

しかし普通の河ではありません。道の左は燃えさかる炎、右は怒涛逆巻く水です。

とてもたやすく歩いて行けるものではありません。

悪人や悪獣から逃げて、岸まで来ましたが、河が怖くて足が震えとても進めません。

後ろには恐ろしいもの達が迫っています。

進退極まり、立ちすくんでいますと、

「阿弥陀様を信じて念仏を称えるならば、必ず無事に向こう岸へ渡ることが出来るぞ。火も水も恐れることはない。必ず護つて下さるのだ」

という声が、こちらの岸から聞こえてきました。

炎の左に、如意を持ったお坊様がおられます。実はお釈迦様なのです。

お釈迦様のお導きの声だったのです。

それに気付いて、進み始めました。

すると悪人達が、後ろから猫なで声で呼びかけます。「何も悪いことはしないよ、安心して戻っておいでよ。そんな道を行ったら死んでしまうぞ。俺達と楽しくやろうよ」

その呼びかけに惑わされ、行こうか、戻ろうかと心が揺らぎましたが、お釈迦様の声こそ真実だ、と決心し必死に進みました。

すると、西の岸の方に仏様のお姿が現れ、

「さあおいで」

と優しく招いて下さっています。

嬉しくなつて思わず手を合わせました。

「阿弥陀様だ」と気がつきますと、火や水の恐れは吹き飛んで、お念仏を称えながら、一心に足を速めました。

するとお釈迦様の教えの通りに、無事に西の岸に行き着くことができました。

絵にはありませんが、阿弥陀様の後ろには大勢の菩薩様がおおいでになって、共に迎え下さったのだ」と叫び、嬉しさの余り感涙にむせびました。

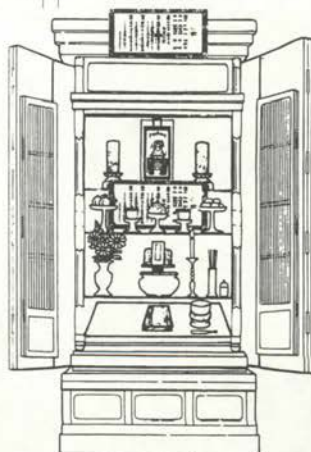
好評
発売中!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）735円／小（27.3×14.2cm）420円

注文・問合せは

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

身障者から学ぶ

新連載第一回

四肢欠損児の 誕生



高木悦男

一

長野で行われた冬季パラリンピックは、冬季オリンピックに勝るとも劣らない希望と感動を私たちに与えてくれた。選手の一人丸山君は「ハンディーは、自分の特長であり、個性である」と言いきり、頑張っているその姿に心打たれたのは私ひとりではないだろう。

身体に障害のある人は、我が国だけでも約三百万人いるといわれている。閉じこもりがちでこれらの人々を、屋外に誘い出すために街から段差をなくすなどの、バリアフリーと呼ばれる運動に取り組んでいる青年がいる。おじいちゃん
乙武洋匡君である。

彼は四肢欠損という状態で生まれてきた。両手、両足がほとんどない身体である。しかし今彼は、

「目立ちたがりやの僕は、身体障害者として生まれてきて良かった」

と明るく話し、元気に街中を電動車椅子で走り回っている。その姿は、パラリンピックで活躍した方々と同様に、多くの人々に感動を与えている。

私と洋匡君との出会いは、彼が小学校に入學したときに、私が担任となつて以来、彼が4年生まで4年の間担任であった。

今回は、小学校入学までに彼に影響を与えた両親と、都立補装具研究所での訓練を中心に記すことにする。これは、母親との話し合いのとき感じたことである。

二

今日あたり生まれるかなと思ひながら、会社で仕事をしていた乙武氏のもとに、病院から電話が入った。

「生まれましたか」

と、はずんだ気持ちで電話を取ると、

「生まれましたが、ちょっとお話ししたいこと

がありますので、ご来院ください」

と、医師からの沈んだ声の電話であつた。

不安を胸に病院に急いだ。案内をうけ医師の待つ部屋に入ると、

「お気の毒ですが、身体に障害のあるお子さんでした」

と、タオルに包まれた両手、両足がほとんどない赤ちゃんを見せられた。ぼう然と立ちつくす乙武氏に、しばらくして医師は、

「どうなさいますか」と問いかけてきた。その言葉の意味が分からないまま、乙武氏は、
「私と家内の子どもです。二人で協力して育てます」

と、きつぱりと言いきつたそうである。

後からこのことを聞いた母親は感激して、
「尊敬できる人だ」とあらためて思ったことを話してくれた。

赤ちゃんは黄疸がひどく加療中であるという理由で、母親は合わせてもらえなかった。一日一日と経つ中で、早く会いたいという

思いがつのり、乳は張ってくるし、不安という私たちの日々が続いた。医師に聞くと、

「今は、未熟児として生まれたので、病院で責任を持って預かっています」

との返答。しかし医師の持っていたカルテを覗き込み、そこに「奇形児」(ドイツ語)と書かれているのを見てしまった。

「平気です。どうぞ会わせて下さい」

と、医師に嘆願し赤ちゃんと対面することができた。

じつと赤ちゃんを見ていた母親は、タオルに包まれ顔だけ出しているわが子を、かわいいと感ずることができ、比較的冷静にその対面は終わった。しかし、育児日誌が生後五か月目から書かれているのを見ると、その後のシヨックの大きさがうかがい知れる。

子供を残し一人実家に戻った母親は、夜眠りにつけば夢に見、眠りから覚めれば現実としての事実を受け入れようと思いつつ、何もできない状態が続いたそうである。

「間違ひなく二人の子なんだ。どんなことをしても二人で立派に育てよう。二人の人生はこの子のために使おう」

と、夫婦二人で誓い合つたそうである。

障害を持つ子ども両親の離婚率は高いと言われている。それはどんな状態で生まれてこようが、二人の子どもであるという自覚。そして二人で力を合わせて育てようという責任感の欠如ではないだろうか。乙武夫婦はこの時点ですでに、しっかりとした考え方をもっていたのである。

三

日がたつうちに寝返りをうつようになり、笑うようになると、親として愛情が増してきた。医師からは、

「このようなお子さんには、往々にして脳にも障害が出る場合もあります」

と言われていたが、目は澄んでいるし、利口

そうに見えてきて、親はかぶりを笑いあつたそうである。

三か月がたつたところから、都立補装具研究所のお世話になることにした。まず、義手、義足を作ってもらった。しかし、子どもが口をきけるようになったころ、

「僕はお出かけのとき、どうしてこんなものをつけなくてはいけないの」

と言われ、「ハッ」としたそうである。

母親は義手、義足が、世間体を気にする自分のためのものであることは分かっていたが、子どもに言われたとき、世間体を気にしすぎていた自分自身を恥じたそうである。

補装具研究所では、軽量で安定した実用的な義足と、能動的な義手の開発に力を入れた。改良しては練習。練習しては改良。歩行訓練や物をつまみあげる訓練が続けられた。訓練は長時間に及ぶこともあり、洋匡もよく耐え抜いたものだと、母親はただただ感心していたそうである。

このように練習が重ねられている中で、洋匡君自身が、座ったまま、両足を左右に動かしながら移動することを覚え、階段の上がり下りも自分で身につけていった。また、物を手と頬で挟んで運んだり、サインペンを挟んで線や丸を書いたりできるようにもなっていたのである。

補装具研究所の方が話してくれた。

「私どもも洋匡君のことを考えて、いろいろやってみました。が、極端な言い方をすれば、皆失敗でした。正常な人間が身障者の立場で考えることの難しさを、味わいました」

また、当初洋匡君は母親の人に見られたくないという気持ちから、家の中で過ごすことが多かったそうである。人が訪ねてきても、母親は彼が玄関まで出てこれないようにして、来客と対応していたそうである。

しかし、洋匡君の好奇心、社交的性格はやがて母親の心を変えていった。やがて実家から世田谷のマンションに戻ったとき、母親は

洋匡君を抱いて、近所に挨拶回りをしたそうである。

「うちにはこんな子がいますので、よろしくお願いします」

今まで胸に支えていたものが「スツ」と消えた。何でもっと早くこんなことができなかったんだらうと後悔した。母親が変わることの大切さを子どもから教えられたのである。

今までは近所つき合いもなく、よその子がいかに家に遊びに来ることなど考えることもできなかつたが、近所の子どもたちと楽しく遊び、笑うわが子の声が聞こえてきたとき、あらためて近所つき合いの大切さを感じ取ったそうである。

補装具研究所が洋匡君が自分ひとりで運転できる電動車椅子を開発してくれた。これで洋匡君の行動範囲が格段に広がっていった。

一方父親も休みのときは、プロレスをしたり、いろいろな遊びをして一緒に過ごした。父親が勉強するときにも、洋匡君に本を与え

て常に一緒だった。本好きな子に育ってほしいという父親の願いもあったようだ。

子育てで大切なことは、安全な環境作りはもちろんのこと、まずは『夫婦の和』ではないだろうか。夫が信頼する妻であり、妻を慈しむ夫でありたい。そして、子どもが成長すると同時に、夫婦それぞれも成長し変わらなければならぬ。また子育ての方針について、

夫婦が同じ方向を向いていることが大事である。乙武洋匡君のご両親はともに、

「この子は身体で社会に奉仕することはできないから、頭と心で人々の役に立つような人間に育ってほしい」

という願いを持ち続けているのである。

(元公立小学校教諭)

坂野泰巨編

選択集入門

選択集十六章之図

本書は『選択集』の各章を絵図におこした『選択集十六章之図』(高田敬輔・画)と、各章を適切かつ端的な言葉で解説した堀尾実務上人による『選択集十六章図略解』の要文を左右の見開きページに配し、『選択集』の大意を知る最良の入門書である。

B5判・上製・本文五六頁(二色刷)・定価 四千円(税込)

株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0480

松島定宣先生

日下部謙旨



香川 智光寺
法然上人腰掛け石に座れる故松島定宣師

恩師松島定宣上人、去る平成十年四月八日、七十五歳の天寿を全うされ、極楽浄土に正念往生の素懷を遂げられました。

西行法師は「願わくは花のもとにて春死なん」と詠じましたが、松島先生は、桜花の舞い散る中、釈尊降誕会に時を同じくしての御往生でした。往生の知らせを受けた者は、「四月八日に往生なんて、最後まで先生らしいね」と、口々に言っておりました。

また、先生の法名の中、道号である「舌道」の二文字に、お念仏一筋、自信教人信された先生のお姿を重ね合わせ、偲ばせていただいております。

私が先生と初めてお出会いはしたのは、昭和六十一年春、京都、大本山金戒光明寺境内に新しく建てられた教師習練道場での伝道学の講義においてでありました。以来足掛け十三年、修練道場、布教師養成講座、各研修会、五重相伝会、さらには仏跡、法然上人遺跡参拝などを通して親しく^{けいがい}聲咳に接し、公私に亘

って御指導賜りました。

ここに、時々先生の姿、おことばを回想致します。

平成九年十月、私は、一泊二日の「松島先生と行く四国法然上人霊場巡り」を計画し、十名の布教の仲間と共に参拝しました。昨年（平成九年）先生は数え年七十五歳、法然上人が四国へご流罪になられた御年であります。「年を取るにつれて、法然上人が慕わしくって慕わしくって……」

と仰っていた先生に、御参りの先々で法然上人を語っていただく予定でした。殊の外この参拝を楽しみにしておられた先生ですが、当日お会いした時はすでに、体調がすぐれない様子で、共にお念仏申すのが精一杯でした。それでも、「四国の次は大阪の勝尾寺にお参りしましょうね」などと、法然上人の晩年のお姿に重ね、先生と一緒に参拝できる日を楽しみにお別れしたのです。まさか、これが

最後の旅行になるとは夢にも思いませんでした。

ここ数年、先生は法然上人を敬慕して止まない思いを、「法然上人十徳」と題して語っておられました。明治時代の「円光大師十徳」に物足りなさを感じておられたようです。私の布教師養成講座のノートにはこのように記してあります。

「法然上人十徳」……松島定宣師

- 一、釈尊出世の本懷を顕明するの徳
 - 二、凡夫往生、女人往生を顕明するの徳
 - 三、新宗（浄土宗）開創の徳
 - 四、代苦行三十年の徳
 - 五、剛毅柔和の徳
 - 六、慈悲無差別の徳
 - 七、精舎一字も建立なき徳
 - 八、念仏三昧発得の徳
 - 九、人々の全階層より尊信を受けるの徳
 - 十、弥陀の化身と尊崇されるの徳
- この「十徳」それぞれについて、先生は熱

く、法然上人を讃仰なされました。そして、その講義の終わりに

「皆さん、もつともつと法然上人について学びましょう。上人のお人柄、み教えをしっかりといただき、皆さんそれぞれの『法然上人十徳』をまとめて下さい。同じ日本人の中にこんな素晴らしい方、尊いお方が出られたことを私は誇りに思います。法然上人の教えに出会えたことは無上の幸せであります」とお諭し下さいました。

四国参拝のあと間もなく、先生は入院。数日後お見舞いに伺いました。入院患者とは思えないほど元気なお姿に、私は驚き、安心しました。別室に移り、先生は開口一番

「もう布教は辞めることにしたよ。決めたんだ。これからは自らの念仏往生を第一に、その準備をやっていくよ」

と。さらに先生は、病状のこと、入院生活のこと、夜中、ベッドの上で二度の勤行をし、

念仏申されていること、これからは、浄土宗の日常勤行について考え、まとめ、著してみたいという希望を語ってくださいました。

「これからは、和語の浄土教、和語による勤行、わかるおつとめが絶対に必要なんだから。早急に何とかしなければ……」

そこが病院であることも忘れるほど、三時間近く話し込んでおりました。その中で、先生が繰り返し仰ったことがあります。

「布教を辞めることを決めてからのこの数日、本当に気持ちいいんだよね。こんな気持ちは数年来味わったことがなかったね。自分の往生のために念仏し、生きることが、本当に気持ちよくって……」

先生の回復を信じて疑わなかった私は、

「先生、隠居にはまだ早過ぎますよ。これから益々、浄土宗は、布教界は先生を必要とするに違いありません。退院されたら、無理なさらない程度で、これからもずっとご指導下さい」

と懇願しました。先生は笑顔で聞いておられました。決心は固かったようで、頷いては下さいませんでした。

「布教を辞めることを決めて、本当に気持ちがいい」

と言われる先生のことばの意味を、私はしばらく考えていました。

布教師養成講座では、各人の布教実演の後の先生の厳しく且つ、懇切丁寧な批評が名物？でした。なかでも、布教を志す者の、「布教は楽しい」「もっと話したい」などということばや態度に対しての先生の批評は、

「あなた、布教をなめてるね」

「仏法を軽んずるのもいい加減にしないさいよ」

「あなたには高座に登る資格はないね」

と誠に厳しいものでした。ある方は、「先生に出会って目が覚めました。教えを受けなければ、つまらん坊主のままで死んでいくところでした」と涙ながらに語りました。

「布教は難行道である」

これは、養成講座、伝道学の講義での先生の第一声であります。

先生ご自身、布教や講義にはいつも原稿を用意し、直前までチェックされる。毎日夜遅くまで、その日の記録、復習、勉強をされている姿に感動を覚えたものです。また、仏教書、宗教関連書はもちろん、文学、歴史、政治、経済、さらには芸能、スポーツ、……あらゆるジャンルの本を読んでおられました。入院中も、ベッドの横には何冊もの本が積んでありました。

三年前、大阪で開かれた落語会に先生をご案内した時のこと。落語が始まると、先生はノートとペンを取り出し、養成講座さながらに速記し始めました。

生涯、先生は布教師として生きられました。布教のことを考えていない時はない、そんな生き方でした。いつも気が張っていたことでしょう。法然上人のみ教えを誤りなく伝え弘

めるために、相当な体力・精神力を要したに違いありません。

「布教を辞める」と決めた時、先生はその重圧から解放され、「いい気持ち」を味わっていたのではないでしょうが。

「布教は難行道」とは、先生ほどの生き方をしてはじめて言えることばだと思います。先生の生き方は私の目標とするところです。

念仏布教に命を懸けられた先生は、最後まで布教の現状を憂えておられたようです。縁ある人に

「法然上人の教えに沿った布教を」と話されていました。

昨年六月の知恩院夏安居道場で、先生は「法然上人の念佛」と題し講演されました。

「今、法然上人は悲しんでおられるぞ、としみじみそういう思いが致します」

「今自分の信じている教えていいのか。人人に説いている念仏義で間違いないのか、この

ように思うことが大切でございます」

に始まり、阿弥陀仏を法身、聖道門的に説く現代の風潮を三方面から「現代の三邪義」と退け、本願成就身、光明攝取身、来迎引接身たる報身の阿弥陀仏をこそ布教すべしと、訴えられました。

表葬の前日（五月二十五日）、私は初めて常光寺の先生の書齋を拝見致しました。書齋もまた、先生の生き方、お姿そのもののように質素で、しかも、多くの本や資料に囲まれていました。なかで目を引いたのは、壁に掛けてあった額入りの一枚の白黒写真でした。増上寺第八十二世、推尾辯匡御法主台下のお写真です。生前、先生が仰っていた。

「推尾大僧正が亡くなられた時、えも言われぬさびしさを感じたものだ。念仏の教え、浄土の教え、わからぬことを尋ねさせてもらえるお方が亡くなった、そんな思いだったね」（推尾大僧正は昭和四十六年四月七日の

御往生でした）

というおことばを思い出しました。このことばこそ、まさしく先生と別れた今の私の気持ちであります。こんなことも尋ねておけばよかった。あれも教えてもらいたかった――。さびしいものです。

先生は八人兄弟だったそうです。

「小さい頃には兄弟の多いことが嬉しくって、一人っ子や兄弟の少ない友達をかわいそうに思ったこともあったよ。しかし年を取ると、次々にその兄弟と別れなければならない。やっぱり心情的に侘しいものがあるね。まあ極楽でまた会えるんだけどね」

と仰っていた先生。今、俱会一処の極楽浄土で懐かしい方々と再会されていることでしょう。

松島定宣先生、どうぞいつまでも、お浄土よりお導き下さいませ。合掌（瀧・慶光寺）

無明抄

信じて
いるのか

秦
恒平

3

疑わないから信じているのだと、そうは言えないから難しい。信じるとは信じていることであり、疑わないことと同じではない。極端なことを言えば、疑っているにもかかわらず信じている場合があるのではないか。疑うも疑わないも心理だけのことであるが、信じている信ではないという事態は心理では保証できない。論理的な整合性を、たとえば整数の加減乗除などを納得するのは、いわば結果や結果に至る過程を信じたのである。神を信じる、仏を信じるのを、論理を信じるのと同じ視はできない。もつと手に負えない。信仰・信心が貴いのは、その難儀な壁を透過しているからだ。

親鸞聖人の言葉をつたえる中でも念頭にこびりついている述懐がある。分かり良く一部の表記を漢字まじりにあらため、すこし長いがあえて引く。

一 各々、十餘ヶ国の境をこえて、身命を顧みずして、（私親鸞を）訪ね来たらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極楽の道を問ひ聴かんがためなり。しかるに、念仏より他に往生の道をも存知し、また法文等をも識りたるらんと、心憎く思しめておはしまして侍らんは、大きな錯りなり。もし然らば、南都北嶺にも、ゆゆしき学生たち、多く座せられて候ふなれば、かの人々にも逢ひ奉りて、往生の要よくよく聴かるべきなり。親鸞に於きては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて、信するほかに別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土に生まるる因たねにてや侍るらん、またと地

獄におつべき業にてや侍るらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人に賺されま
ひらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候。その故は、自餘の行
をばげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄におちて候はばこそ、賺されたて
まつりてといふ後悔も候はめ、いづれの（難・聖）行も及び難き身なれば、とても地獄は
一定住みかぞかし。弥陀の本願真実におはしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏
説真実におはしまさば、善導の御釈、虚言したまふべからず。善導の御釈真実ならば、法
然の仰せ虚言ならんや。法然の仰せ真実ならば、親鸞が申す旨、また以て虚しかるべから
ず候ふ歟。詮ずるところ愚身（親鸞）の信心に於きては、かくのごとし。このうへは、念
仏をとりて信じたてまつらんと、また捨てんと、面々（あなたがた）の御はからひな
りと、云々。

ここで言われている「信心」は論理整合の受信では全然ない。いわば偉大な「祖師」や
「如来」への全面の傾倒だけが吐露されている。あさましげに譬えるなら、阿弥陀仏とい
う親亀がもしこけたら統べて全てがこける、のである。親鸞は、凡愚の身にしてその上は
地獄におちようとも甘んじて受けよう、自分は「祖仏」の仰せを「まこと」と信じるほか
に立つ瀬は所詮無いのだと言いつてしまふ。

浄土への信頼は、すべて本願への信仰にかかって来る。信仰の「構造」は、むしろ分か
りやすい明快なもので、法然上人の選擇集があれだけの漢文でありながら、わたしのよう

な者にでも曲がりなりに拝読できるのは、根の明快さゆえである。

東京工業大学で授業をしていた頃に、浄土三部経にふれて念仏信仰と四十八願や本願のことを、やや詳しく話していた時、ある学生が、いくらか予期したとおりの、こんな指摘をした。

——そういう（秦サンのいま紹介してくれた）法蔵菩薩の大願成就が、何を根拠に説明されているかと言うと、現に法蔵が阿弥陀如来となられ、現に西方極樂浄土で法輪を転ずることの十劫の久しきに及んでいる「のだから」という一点で尽きています。その事自体は論理的（ないし科学的）に証明されていず、される筈もなく、ただ信じられている。浄土教の全構造を支えている拠点は、阿弥陀如来が「現に」極樂浄土においてになる以上、本願の成就その他全ても信じられるという筋道から成っている、と思えます——と。

じつは、彼は、そういう拠点や筋道を非難しようと発言したのではなかった。その次ぎを聴かねばならない。

——「信じる」というのは、そういうことかと、じつは不思議に感動しました。科学的な論証に明け暮れているぼくたちですが、ぼくたちなりに「信じる」という不思議さには、もやもやとしたものを覚えてきたんです。論理整合に対してだけ向けられる信頼より格別に深い、もつとべつの信仰がありうるらしいと漠然とは想像してきましたが、浄土教の信の組み立てにその一例が示されたと感じています。ここ（うまく言えませんが）を超えて行かないと成り立たない、信心。見ようによればたわいない、信心の拠点。だけど、その向

こうに「救われたい」人間の暮らしがリアルに見えて来て、凄いなと思います――。

学生は、なにも皮肉を言っているのでは、ない。「信じる」ことの機微をむしろ肯定してくれている。露骨にいえば「イワシの頭も信心から」という真実に頷いている。

親鸞はその一つの支えに、祖師や如来への人格的傾倒、神秘的な被圧倒感を強く肯定して、そこへ論理整合侵入を防ぐ堅い壁を建てた。祖師信仰という、特異に日本的な傾向が言われるけれど、必ずしも日本的とはいえない。信仰という表現自体に振り仰ぎたい聖人や上人への思慕の生きるのは、それが、より社会的段階の宗教の本来なのだと思われる。

自然の神秘への信仰だけでは満たされない人間的なものが生きて来る。法蔵の大願とその成就におどろき感謝するというのも、人間的な努力と精進の莫大なことに帰依「したい」気持ちに連なっている。それらが事実である、論理整合をともなった事実、科学的事実として容認できる、といったことを求め始めれば一切が絵空事になる。絵空事の真実を信じられない者に、真の信心は、浄土の真実は、得難い。疑いを超えた信仰・信頼。生易しい事ではない。今日の仏家は、ほんとうに信仰されているのだろうか。

「お勤め」ということばをお坊さんの口からも聴く。篤信の在家の人にもよく口にされる。

「勤行」という厳かな物言いがあり、ひらたく言い換えれば「お勤め」になる。

これが転じてサラリーマンの「お勤め」にもなる。「サラリーマンは気楽な稼業ときたまんだ」となると、「お勤め」とはいっしょに「よろしくやる」「やるだけはやる」意味になる。「やっておけば済む」ものになる。「お勤めはほどよく済ましておいて」のアフターファイヴ

に楽しみを求め、勤め人は巷へ帰って行くが、仏家はどこへ帰って行くのか。

そういう「お勤め」感、近代現代に始まったことではなかった。日本ていえば、奈良末・平安初期の例えば『靈異集』的信仰風俗に、すでに幾つもの例が見えている。「お勤め」の間にいねむりする坊さんを爪弾きしている宮廷女房たちの舌打ちも物語や日記の類に、何度でも出会う。

それでもいいのです。

そう法然はゆるし、そう親鸞はおしえただろうか。不断の称名、一向の念仏。それは要するに「お勤め」であるのかと、不審に取りつかれていたことがある。「信じる」ことは、その際、どこにどう生かされるのだろうか。ただ呪文のように、あるいは記号のように唱えていても、六字名号にはすでに如来の大願成就の真義が籠められているのだから、それさえ分かっていたら、ようするに記号のような呪文のような「なんまいだ」でも十分なのか。それとも一念一念につよい信心をうちこみ感謝をこめて称えるべきなのか。念仏勤行とはそのどっちであるのかを、皮肉でも何でもなく、「お勤め」に勤しんでいるお坊さんに問い質したくてたまらない時期があった。その時期を、もうどこかに置き去りにして来たのだろうか。それとも、まだ問い質したいのか。

どうでもいいことで、深くは、よそごとには過ぎない気もするけれど、それでも、ちいさな安心の一つを得たいが故に、「ほんとうに、信じていらっしゃいますか」とわたしは、今でも念仏が「お勤め」のお坊さんに尋ねてみたい。「ほんとうに信じていますか、極楽浄土

を」と。そして、心の奥底に、じつはこんな返答を期待しているのではないかと、我と我が心根を推し量ったりもするのである、つまり、こうである。

「そんなものは、在りやしませんよ。だから信じるんです。信じたらいいんですよ」と。分らない、分らない。何でこんなことを口走っているのか、自分でも分らない。しかし、この架空の返答にじつに近似した信仰をわたしは抱き、そして安心しているのではないだろうか。何かしら具体的な祈願をこめて「南無阿弥陀仏」と称えているとき、じつは、いい気持ちではない。何らの祈願ももたず、ただもう「ナムアミダブ」と繰り返しているだけの時のほうが、気が澄んでいる。落ち着ける。嬉しくもなる。どっちにしても、そんなのは呪文であり、記号の暗誦にすぎないと叱られるだろうか、叱られてもいいから、その叱ってくれる人に問い直したくてならない。

「ほんとうに、信じていらっしゃいますか」と。

はだ こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第5回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授。平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みこもりの湖（つみ）」、「冬祭りの」、「京都感覚」、「嵐山」、「死なれて・死なせて」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「秦恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。

浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

初夏へ

浄土俳壇

白日の水のてらてら立夏かな

いくばくの未来かがやき聖五月

売声のさおや竿竹桐の花

雨後の銀夕日の金の白薔薇

緑さす高原どこも目の保養

御忌会より桜会となりぬ増上寺

菜の花の間を分けし筑後川

兒玉仁良（入間市）

西域信行（京都市）

春雷や首輪すり抜け遁走す

山桜四〇〇年の若さかな

松本厚子（町田市）

御忌法話聞く後方に救急車

先意庵閉ざされしまま花筏

梅雨寒の外来白く皆無口

大屋根に水煙の立つ大夕立

山本美代子（姫路市）

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

西六一五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株) 島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八
FAX 〇七五—三一五—三七五三

アばずる

☆まちがいは7ヶ所あります。



まちがいがし

答えは34ページにあります。



4月号の答えは「イチネンセイ」でした。応募総数92通のなかからは栄ある当選者は次ぎの方です。
和歌山・三宅直喜 青森・山内俊子 茨城・長谷川静光 神奈川・高橋忠男 千葉・鈴木ちか子(敬称略)

事務局便り

● J・FORUM (浄土フォーラム)

毎号、ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM (浄土の広場)」。

俳句や短歌などのほか、書評や随筆、詩、身近な出来事や情報などを、左記の要領でどんどん応募下さい。

1 随筆・歌など：四百字詰め原稿用紙十枚以内。

2 俳句・短歌・川柳など：四首まで。

3 その他、本誌の掲載記事に関するご意見や感想など：適宜。

いずれもタイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却致しませんので、必要な方は事前にコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈致します。

◎ 本誌四月号訂正とお詫び

四十三頁特集宗祖の忌日法要「真宗大谷派」の上段二行目毎年十二月二十一日」は「毎年十一月

二十一日」の誤りでした。ここに訂正し、お詫びいたします。また同頁の写真は京都・東本願寺から提供いただいたものです。

◎ 本誌五・六月合併号訂正とお詫び

四頁、六十六頁の見出しの「當麻寺」の當の字、十八頁目次の「連載 無明抄」の抄の字、二十六頁上段の、「念仏」の念の字が、それぞれ誤った表記になっていました。ここに訂正させていただきます。また読者並びに関係各位の皆さまにご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫びいたします。

● 新規会員紹介

購読会員

埼玉 越谷 中島キヌ

岩手 盛岡 中島隆之

静岡 東豆組 昌運院

一般会員

東京 北部組 法受寺



「山内に極楽往生の僧あり」

小田原 常光寺

小雨降る五月二十六日、小田原常光寺にて松島定宣上人の本葬儀が行われた。静かに落ち着いた松島上人らしい葬儀であった。その山門に建っている立て札に、冒頭の言葉が書かれていた。

寺の住職を勤めた人の葬儀のときは、たいていが『山門不幸』の言葉であることが多い。私自身の先住のときもそうであったし、知恩院でさえそうであったように記憶している。そしていつもこの言葉は議論の対象となる。お浄土への往生を説き、阿弥陀仏の本国に還ることを不幸という言葉にするのは適切でないという、誠にものともな考えからであるが、つい家族の死であったり、師僧の死であったりということ、まさか『山門幸福』とは言えないだろうと逆説的な言葉がでて、いつも議論にならなくなっていたように思う。

しかし、『死』の現実と向き合ったときに、俗的表現ではなく、高い次元からの往生を説くことで、悲しみを癒し、希望を与える我々僧侶が、自分たちのときは、平気で『不幸』などという言葉をいつまでも使っていることには、私自身も抵抗はあったが、実行できないままであった。

今回松島上人の葬儀、上人の人格がみんなを納得させてしまうのか、上人の極楽往生が誰もが疑わないという確信があるからなのか、ごく自然にこの言葉を見たとき、感激と同時に何ともうれしい気持ちにさせてくれた。現住職の阿川上人のご見識を高く讃えたい。

池の月取るまなきまきまき青嵐
還来穢国度人天を念じ、十念を捧げます。

岱潤

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土

六十四巻七月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十年六月二十五日
発行——平成十年七月一日

発行人

編集人

印刷所——株式会社 シー・ティー・イー

真野龍海
宮林昭彦

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七十四明照会館内

発行所 法然上人鑑仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六

振替〇〇一八〇八八二八七

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できた。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上り。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の音が聞こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1L V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo: シーマ 41LV ボディカラー ダークグレー・イッシュブラックサートーン (P) 1. 4S 9・特別塗装色「本革シートはイースターグリーン」●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジン V8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm (ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席 SRS サイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ (運転席・助手席 SRS エアバッグ) ●ABS (アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム (TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえ、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
NISSAN

人間のやさしさをクルマに。



これが、
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

サッポロ生
黒ラベル



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。⑬

●ご協力をお願い！自販販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社